21　次の文章は、久米正雄の小説「虎」（「文章世界」一九一八年五月）の冒頭からの一節である（ただし、一部省略がある）。これを読んで、後の問いに答えよ。

〈広島大〉二〇二二年度出題

　新派俳優の深井八は、もの通り、正午近くになってを覚した。はもう晴れ切った秋の日である。彼は寝足りた眼をわざとらしくしばたたいて、障子の越しに青い空を見やると、思い切って一つ大きな伸びをした。が、ふとその動作がわれながら誇張めいているのに気がつくと、舞台でのな表情が、ここまでい込んでいるような気がして、思わずをしながら苦笑した。彼は俳優の中でも、実に天性の誇張家であった。そしてその誇張が過ぎて道化た気分を醸すに、彼の役処の全生命があった。彼は新派中での最も有名な三枚目役者だった。

　彼はもとのだったが、持って生れたな性質は、新派草創の祖たるオッペケペーの川上が、革新劇団の旗上げで、その下廻りを募集した時、たちのをも顧みず、真っきに応募した。が、いよいよその試験めいたものを受けた時、川上はつくづくこのの哥兄を見て、さもったようにこういった。

　「おまえさんは到底役者になる柄ではないね。」

　①彼がての言葉を尽したにもらず、川上は笑って受けけなかった。が彼はそれでも懲りなかった。そして今度は頭をすっかりりめて、人相を変えて再び募集に応じた。ところが丁度一座が多人数を要したので、彼も川上の眼をれ、人々に紛れてうまく採用されてしまったが、入ってしまってから、川上はすぐに彼に気が附いた。

　「やあ、こいつとうとう入りやがったな。」川上は幾分驚嘆の気味で彼にいった。

　「へん、どんなもんです。」と彼は剃った頭を一つぽんといて見せた。

　「まあ仕方がない。入ったんならりやれ。」と川上も笑いながら、それでも心中こういう男の使い道がないでもないと思って、快く入座を許さない訳には行かなかった。②こうして彼は俳優になる時から、既に立派な三枚目の役を勤めた。そして今では、新派興亡の幾変遷を経て、とにもかくにもの一座に、なくてはならぬ俳優となった。給金も相応に取れる。役者らしくたまには女も出来る。思えば彼もうまい出世をしたものに相違なかった。

　が、彼とてもまた、決して自分の今の地位に、満足している訳ではなかった。彼ももう三十五歳を越えていた。の職業に従事しているのなら、分別盛り働き盛りの年輩だった。けれども今のままの彼は、舞台で絶えず道化を演じているに過ぎなかった。真面目な役は一つも振られなかった。彼はただ、観客をわっと笑わすためにのみ、もしくは浮き立たすためにのみ、配合的に用いられるばかりだった。これでは手品師の介添に出る、に変らぬことは彼自身も知っていた。知っていたが仕方がなかった。彼はいい年をして相変らず、大向うをわやわや笑わして、自ら己の境涯を笑っていた。

　彼にはもう八歳になる子があった。そして去年初舞台を踏んで、彼と同じく、否彼よりももっと正式な、新派俳優になる未来をっていた。彼はその子を決して、三枚目にはしたくないと思った。③自分と違って正当な、立派な立役に仕立てるのが願いだった。

　今、深井はぼんやり床の上で、昨日受取った役の事を考えていた。昨日は今度開くの二階で『しき仲』の本読みがあったのだが、そこで彼の振られた役というのは、ただ『虎』の一役だった。人の名ではない、ほんとの獣の虎にする一役だけだった。

　虎一役！　彼は考えると不満でもあり、また不平もいえぬほどしくもあった。彼はかつて猫にも扮した。また犬になって、幕外で踊った事もあった。そして動物役者という異名をさえ取っていた。で今更虎の役を振られたとて、それが何の不思議であろう。むしろ彼にその役が廻らなかったら、それこそ一つの不可思議なのである。

　けれども彼は、彼が虎に扮することの不思議でない事を、ちょっと悲しく感じた。長年れて来ていながら、職業だと思っていながら、どうせ茶化しているのだとは思いながら、自分の中なる『人間』が馬鹿にされているような気がして、ちょっとの間は腹立たしくさえ思った。

　昨日の本読みの時にも、丁度作者が三幕目を読み始めようとして、さて一座をずっと見渡しながら、

　「ここで一つ在来の趣向を変えまして、清岡球江のを見せるために、彼はヴェランダに虎を飼うことにしました。南洋産の猛烈な奴で、そいつが幕切れに暴れて、球江に喰いつこうとする処を考えたんですが、どうでしょう。」

　といった時、皆の視線は一度に彼の方へ注がれた。そして座長の由井が、

　「そいつはよかろう。それで深井君のり役が出来た。受ける事は疑いなしさね。」

　といった時、皆のもう一度彼の方へ投げた視線が、何となく嘲笑の色を帯びているように、彼には感ぜられたのだった。けれどもまたの川原までが、

　「そいつはきっと評判になりますね。④その幕はすっかり深井君の虎に食われてしまいますよ。」

　といった時には、彼も笑いに加わりながら、幾らか得意にさえなっていた。……

　「とにもかくにも、」彼はなお床の上で考えた。「振られた虎一役は、うまくやらなければならない。獣に扮することが、何も恥辱という訳ではない。獣でも鳥でも、うまくりさえすれば立派な役者なのだ。そして何といっても、虎を演れる役者は、日本中に俺しかないのだ。そうだ。一つ虎をうまくやって見物をわっといわしてやろう。そして外の役者どもを蹴とばしてやろう。今の俺が生きて行くには、そうするより外はないのだ。」

　彼は急いで起き上ると、にいる妻を呼んで、着物を着かえた。そしてもう晴々したをしながら、階下へ下りて行った。そこの長火鉢の傍には、黄色い布巾が懸けてある、彼の遅い朝の食台が待っていた。彼は急いでを使うと、そそくさとその朝飯とも昼飯ともつかぬ物に向った。

　縁側には息子のが、ぼっこをしながら、古い演芸画報のを、見るともなく繰り返していた。その口絵の中には、極くれにしか載らぬ、彼の小さい写真姿があるに違いなかった。お情けでたまに載せてもらう写真。彼は息子に対して、もながら恥らいを感じた。この息子の眼に、役者としての自分がどの位に映るだろう。そしてそれが父としての自分と、どれだけのを起すだろう。――彼は漠然とそんな事を考えて、を運んでいる時に、亘は不意に声を掛けた。

　「お父さん。今日は稽古がお休みなの。」

　「ああ立稽古までお父さんは休みだ。」

　こういいながら彼は、覚えなければならぬが一言もない虎の役を、改めて苦々しく思い起した。彼は実際稽古場へは出ても、今度は他人と白を合わせる必要もなかった。要するに稽古というものは、彼にはいかに虎らしく跳躍すべきかを、一人考えればそれでよかった。

　がしかし虎というものは、一体どんな飛び跳ね方をするのだろう。彼は絵にいた虎は見た。旧劇のる物に出る虎も見たが、実物の虎は、ただそれらを通して、漠然想像しているに過ぎなかった。いざ自分が演ずるとなると、いかに動物役者の自分にも、まるで特徴がらなかった。いずれ猫属に入っている獣だから、勢い立った大きな猫と思えば大差はなかろうが、もし旧劇の猫騒動なぞに出る、猫の以上に一歩も出ないで、口の悪い劇評家なぞから、深井の虎は文字通りに、虎を描いて猫に類するなぞといわれてはだ。――彼はまたそんな事を考え続けた。

　息子の亘は父がそんな事を思い悩んでいるとは知らず、親にる子供の技巧の、おずおずするような甘えた口調で、なおもを進めて行った。

　「それじゃどこへも行く御用はないの。」

　「うん。まあないな。――だが何だって、そんな事を聞くんだ。」

　「僕ね。お父さんが暇なら、今日上野へ連れてってもらいたいんだよ。お天気がいいんだからさ。ね。連れてっとくれよ。」

　「上野のどこへゆくんだ。あんな処へ行ったって、少しも面白くはないじゃないか。子供に絵の展覧会は解らないし。――」

　「だって僕動物園へ入って見たいんだよ。去年からまだ一度も行かないんだもの。」

　「動物園？」

　思わず反問した彼は、頭の中でひらひらと思い浮ぶ事があった。

 ⑤彼はこの子供の言葉を、一種の啓示として感謝していいか、一種の皮肉として苦笑していいか、どっちに取るべきかに迷ったが、たとえ子供を通して、神様からわれているにしても、この機会を利用して、虎の実態を研究して置くのが、昨今の急務だと彼の職業が教えた。

　「動物園へが来てるんだからさ。ね。連れてっておくれよ。」

　「そうだな。それじゃたまには亘坊の相手になって、河馬でも虎でも見て来ようか。」

　（中略）

　上野の秋は木々も色づいて、広く白い散歩道には、人の流れが所々に日傘を浮かして動いていた。屋内にばかり居馴れた深井は、青空の下で自ら気が晴々した。彼は真っぐに動物園へ向った。

　園内に入ると、亘は喜んでけ出そうとした。深井はそれを引留めて、

　「じゃお父さんは虎を見ているから、お前はすっかり見て廻ったら帰っておいで。」といい渡した。亘は父がなぜそう虎に興味を持つかとする余裕もなく、勇み立って父のからの解放を喜んだ。彼はもう走って行って、猿のの前にいる多勢の子供の中に紛れ込んでしまった。

　父もまた子からの解放を喜んだ。そして一人ゆっくり歩を運んで、ずっと前に来た時の記憶をりつつ、猛獣の檻を探し廻った。目ざす虎のいる所は直ぐに解った。

　彼は妙な心持で檻の前へ立った。方二間ほどの鉄の檻の中には、彼の求むる虎その物が、げに前足をえて、っていた。その薄汚れた毛並みと、どんより曇った日のような眼光が、ず彼の眼に入った時、彼はちょっとした落胆を感じた。余りに今まで想像していた、猛獣の威勢と違ったからである。けれどもじっとめている間に、彼の心はだんだん虎に同情して来た。一種のとともに、妙な愛情さえも生じて来た。この朗らかな秋の日を、うすら寒く檻の中にされて、あらゆる野性の活力を奪われ、ただどんよりと蹲って、人々のるがままに動きもせぬ獣、⑥その獣こそは自分の境遇にも似ているとさえ感じた。しかしどこが似ているのか、彼自身にも解らなかった。

　彼は漠然とそんな感慨に打たれて自分がこの虎に扮するのを忘れ、虎の肢態を研究するのを忘れてじっと檻の前に立っていた。

　虎も動かなかった。彼も動かなかった。この不思議な対照をなす獣と人とは、ぼんやり互いに見合ったまま、じっといつまでも動かなかった。いには深井は、虎と同じ心持を持ち虎と同じ事を考えているように感じた。

　突然虎は顔を妙にめた。と思うとその途端に、それだけ鮮かな銀色のを植えた口を開いて、大きな獣のをした。開いた口の中は鮮紅色で、というよりはの開いたようだった。がそれも一分間とたずに、虎はまた元のような静けさに帰った。

　ふとわれに帰った深井は、危うく忘れかけた自分の目的を、再び心にらせた。けれども眼前の虎は、彼にただ一度の欠伸を見学させただけで、あとは林のように動かなかった。それでも彼は満足した。これだけ虎の気持になれればあとは、自分で勝手に跳ね狂えるように感じた。

　「そうだ。一つ思い切って虎になってやるぞ。俺には色男の気持なぞよりも、もっと切実に虎の気持が解るのだ。」こう彼は心に叫んだ。

　やがて彼はそこへ戻って来た息子の手をひいて、⑦前よりももっととしながら、動物園の門を出た。――

注　新派……新派劇の略。旧劇（歌舞伎劇）とは流派を異にする大衆演劇。

　　哥兄……威勢のよい、勇み肌の若者。

　　オッペケペーの川上……オッペケペー節で人気を博した俳優の川上音二郎（一八六四～一九一一）。

　　欣然……心からよろこぶさま。

問１　傍線部①に「彼が凡ての言葉を尽したにも係らず、川上は笑って受け附けなかった」とある。これは二人のどのような様子を述べているか。説明せよ。

問２　傍線部②に「こうして彼は俳優になる時から、既に立派な三枚目の役を勤めた」とある。これは深井のどのような資質をあらわしているか。これより前の本文中から六字で抜き出して答えよ。

問３　傍線部③に「自分と違って正当な、立派な立役に仕立てるのが願いだった」とある。なぜこのような願いを抱いているのか。理由を説明せよ。

問４　傍線部④に「その幕はすっかり深井君の虎に食われてしまいますよ」とある。これはどういう意味か。説明せよ。

問５　傍線部⑤に「彼はこの子供の言葉を、一種の啓示として感謝していいか、一種の皮肉として苦笑していいか、どっちに取るべきかに迷った」とある。ここでの「一種の啓示」と「一種の皮肉」の意味するものをそれぞれ説明せよ。

◎ 問６　傍線部⑥に「その獣こそは自分の境遇にも似ているとさえ感じた」とある。虎と深井の境遇のどこが似ているのか。本文全体を踏まえて説明せよ。

問７　傍線部⑦に「前よりももっと欣然としながら、動物園の門を出た」とある。なぜこのように変化したのか。深井の心情に即して八十字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　Ａ周囲に笑われながらもＢ役者を志望し、必死に熱意を示そうとする深井の様子と、Ｃ深井に素質はないとみなして取り合わず、軽んじる Ｄ劇団を率いる川上の様子。

深井（Ａ・Ｂ）と川上（Ｃ・Ｄ）について「様子」を軸に対比して書かれていないものは全体０。

Ａ＝２〔「朋輩たちの嘲笑」を踏まえた表現であれば可。〕

Ｂ＝３〔「役者になることへの熱意」の意が書けていないものは不可。〕

Ｃ＝３〔「ったように」の意が書けていないものは不可。〕

Ｄ＝２〔川上が劇団の座頭であることについて書かれていれば可。〕

問２　天性の誇張家

問３　Ａ芸歴を重ねても Ｂまじめな役を演じる機会も得られず、舞台の添え物である道化役に甘んじるしかない自分の立場にＣ不安と不満を抱いており、せめてＤ未来ある息子にはＥ正統派の役者として立派な役者人生を歩んでほしいから。

Ｂ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２〔「ベテラン」「経験を積む」などの意であれば可。〕

Ｂ＝２〔深井が「主役ではない」「本筋に関係ない」などの意であれば可。〕

Ｃ＝２〔自身の境遇に対する負の心情が書けていれば可。〕

Ｄ＝１

Ｅ＝３〔「正式な役者となることを望む親心」の意であれば可。〕

問４　Ａ舞台の添え物であるはずの深井演じる虎が Ｂ見物客の注目を独り占めにし、Ｃ本筋を演じる他の役者が存在感を失ってしまうこと。

Ａ＝３〔深井が「虎」を演じていることと、「虎」は主役ではないことが書けていれば可。〕

Ｂ＝３〔「注目を集める」「強く印象付ける」などの意であれば可。〕

Ｃ＝４〔「物語の主役・筋がかすんでしまう」などの意が書けていれば可。〕

問５　一種の啓示＝Ａ動物園で Ｂ実際の虎の動きを見て、Ｃ自分の演技の参考とすればよいということ。

Ａ＝３／Ｂ＝３

Ｃ＝４〔「見ればよい」「見る口実を与えた」など、Ｂにとどまっているものは不可。〕

一種の皮肉＝Ａ動物を演じて滑稽さを表現する人間が、Ｂ動物に教えを乞うこと。

「人間」と「動物」の対比がないものは全体０。

Ａ＝５／Ｂ＝５

［別解］一種の皮肉＝Ａ役者ではなく、Ｂ動物役者に過ぎないことを思い知らせたこと。

動物役者ということを認識させたという内容がなければ全体０。

Ａ＝４／Ｂ＝６

問６　Ａ本来であれば自由に生きられたはずなのに、Ｂ見物人の期待や思い込みに応えるという枠組みの中で、限られた役割を果たすキャラクターとして消費される状況から逃れられず、Ｃ誇りを奪われて鬱屈としている点。

Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２〔「のびのび」「威勢よく」などの場合は１点。〕

Ｂ＝５〔「枠組み」の説明と、求められる役割から逃れられない受け身の状況が書けていれば可。〕

Ｃ＝３〔Ａを失ったことによる「落ち込み」が説明されていれば可。〕

問７　Ａ虎役として他の役者を食ってしまうと褒められて喜んでいたが、Ｂ動物園で実際の虎と同化する感覚を経て己の演技力の向上を確信し、Ｃ動物役者としての自信をさらに深めたから。（80字）

Ａ＝３〔問４の内容で「喜び」を覚えていたことが書けていれば可。「鬱屈」「不満」などは不可。〕

Ｂ＝４〔Ｃのきっかけである「虎との同化」と「成長」が書けていれば可。〕

Ｃ＝３〔動物役者としての自負を深めたことが書けていれば可。「虎の気持ちがわかった」という点だけでは不可。〕